

ローマのカンパーニャとイギリス風景画

—ターナーからエトラスカンズへ—

山口恵里子（筑波大学）

ローマ近郊のカンパーニャは、18、19世紀を通じてヨーロッパの画家の避暑地になったばかりでなく、彼らの風景画にインスピレーションを与え続けた。J. M. W. ターナーは自らの想像力を用いながらも、グランドツアーの画家R.ウィルソンらの影響を受けてクロードやプッサンに倣ったカンパーニャの風景を描いた(*Landscape: Composition of Tivoli*, 1817等)が、ターナーとローマのアトリエを共有したC.L. イーストレイクは*A Panoramic View near Rome*(c.1818)でカンパーニャの丘陵をパノラマで描き、クロードの風景画からの離脱を目指した。本発表ではこの作品を起点にして、19世紀イギリス人画家がもはやアルカディアではなくなったローマのカンパーニャの風景に自身の経験、感情、そして身体的な感覚を投影させるようになる過程を追跡する。

1816年から1830年までローマを制作の拠点としたイーストレイクは、カンパーニャの山賊をも題材にした。その作品は、カンパーニャに対する民族誌的な関心をイギリス人画家の間に引き起こすとともに、彼らに自らのカンパーニャでの体験や知覚的な経験を描かせる引き金になった。その経験の描写を、イーストレイク、および1830年代に独自の筆触と色彩でカンパーニャを描いたS. パーマーの作品(*Villa d'Este, Tivoli*等)で検討する。

1840年代にカンパーニャを旅したエドワード・リアは、自著*Illustrated Excursions in Italy*(1846)で場所の感情を記述し、その感情を風景画に描き入れた。たとえばリアは、戦地だった湖畔で「この場所の孤立感には特に印象的だ。陽気な人々が集まった過去と人が去った現在を繋ぐものは何もない。間の世紀は孤独で詩的な感情を砕くのには何の作用もしなかった。」と記し、その孤独感を漂わせた風景を描いて文章に添えたのである。

1850年代以降イタリア人画家G. コスタの許に集まったイギリス人画家(G. H. メイソン、F. レイトン、W. B. リッチモンドら)は、古代エトルリアの一部だったローマのトラステヴェレ地区の生まれであるコスタを「エトルリア人」と呼んだが、1883年には彼らも「エトラスカンズ」と呼ばれるようになった。彼らは、自然を“sentiment”とともに表現するように唱えたコスタに従い、自らがその場所に感じる精神的な繋がりや身体的感覚をもカンパーニャの風景に描出するなど風景に対して主観的なアプローチをとったが、一方で自然を永遠なるものと捉え、その自然を描くためにパノラマを強調した横長の構図を用いた。彼らの作品はプッサンやクロードの風景画の復活とも評されたが、その風景にはイギリス絵画が好んだ「読解可能な主体」はいない。19世紀イギリス画家による「伝統的な」風景画への挑戦は、カンパーニャを実験の場として、イーストレイクのパノラマの構図および世俗的画題の選択、リアらの経験的、感情的な風景の描出、そしてエトラスカンズによる画家と一体化した場所の表現を導き、主観/主体の問題をも提起するようになるのである。